

つぶやき

院長 長山 直弘



私が中2の時だった。私の或る身体的疾患を心配した母が、郷里から遠く離れた土地で民間療法を受けさせた。それで1か月ほど休学して家族から離れて生活することになった。9月のことだった。

私の家は住宅地で、周りには家々があり、その向こうは三方が山に囲まれていたが、新しい居留場所は四方が平野で地平線をどこまでも見渡せた。私は毎日夕日が地平線に沈んでいくのを飽かず眺めていた。地平線に落ちる夕日を見るのは初めての体験だった。

ある時、私は見渡す限り誰もいない平野に立って、地平線に沈んでいく美しい夕日を見ながら、昔の人は西方浄土さいほうじよどがあると信じたが、それは無理からぬことだなあと考えた。

その途端、私の右後方少し上の方に何か迫ってくるのを感じ、『西方浄土は近くにあるぞ』という威厳のある声を耳か心で聞いた。

えっ？…今のは…何だ？…

その時聞いたことばはその後ずっと私をとらえ続けた。真実とは何か、人はどこから来て何処へ行くのか——これが生涯追い求めるテーマになった。

高校生の時、物理学を習って、真理に一番近いのは物理学であると思った。それで私は大学では理工学部^{リコウガクブ}に相当する部へ行った。しかし入学してしばらくすると物理学では真理は分からないと分かった。それで個人的に宗教や哲学を勉強した。そのうち宗教や哲学では現実・生身の人間と距離があり過ぎている、人間の構造を基礎にして出発しないと真実は分かり難い、と思うようになった。無性に医学を学びたくなって、医学部に入った。それでも永らく真実の方向性が分からなかったが、六十歳台になってやっと人間や宇宙の全体がぼんやりと分かりかけてきた。

今の私をご覧になって、あの時のご存在はどう思われるのだろうか、と考えた。まだ不合格な気がする…。そう思うのは何故だろう？

或る人に言われた。「大切なのは、何をしたか、何が分かったか、ではなくて、どういう存在であるかということだ」

そうだ！その通りだ！！

日は暮れかかって、道はなお遠い。でも人生にはいつでも、そして最後まで一発大逆転というのがあり得ると聞く。諦めることなく落ち着いて、昨日より少しでも善い在りようになれるよう、今日を歩んでみよう。